

「どうした家康（1）一向一揆への対処で見せた家康の「冷酷」と「寛大」」 NTTメールマガジン「BizClip」からの紹介

1月から、NHKの大河ドラマ「どうする家康」が始まりました。主人公は、タイトルにある通り徳川家康。松本潤さん演じる家康が、人生で出会う折々の事件、出来事の中でどのような判断をしたのかを中心に、話が進んでいきます。

2月19日に放送された第7回「わしの家」で取り上げられたのは、地元の三河（現・愛知県東部）で起きた一向一揆。家康の三大危機の一つにも数えられているこの出来事で、家康はどのような判断をしたのでしょうか。

一向一揆が起きた原因については、いくつかの説があります。その頃、寺院には課税や領地への外部権力の立ち入りを拒否できる不入権が認められていました。

三河にある本證寺に無法者が侵入した際、家康の家臣が寺内に入って捕縛しましたが、これが不入権の侵害にあたるとして本證寺側が反発。一揆になったというのがその一つです。また、同じく三河にある上宮寺に家康の家臣が入り、兵糧を奪ったことがきっかけだったという説もあります。

家康にとって誤算だったのは、家臣から一揆側に付く者が続出したこと。その頃、一向宗は三河に多くの門徒を持っており、その中には渡辺守綱、蜂屋貞次、本多正信・正重など、家康の家臣が少なからずいたのです。こうした勢力だけでなく家康に反感を持っていた国衆などが加わり、家康側と相対しました。

衝突がいくつかあったあと、年が明け1564年になると戦いが本格化。大久保忠勝・忠世が守る上和田のとりでに一揆衆が攻め入った上和田の戦いでは、家康が自ら出陣し、被弾するなど、激しい戦闘が繰り広げられました。

次第に家康側が優勢になり、同年2月、一揆勢は家康に和議を提案しました。主な条件は、「一揆を企てた者、加わった者の命を保障する」「寺院については（不入権を持った）以前と同じ状態にする」の二つです。家康はこれを受け入れ、一揆は解散しました。しかし、話はこれで終わらなかったのです。

一揆を企てた寺院に課せられたのは……

家康は、一揆の主な舞台となった寺院に改宗を迫りました。寺院側が「以前と同じようにすると言ったではないか」と反発すると、家康は「寺が建つ以前は野原であった」と言い放ち、寺院や道場を破却。一向宗は三河での活動を約20年間禁じられてしまいます。

自らを裏切る形で一揆側に付いた家臣については、厳しい刑に処することなく帰参を許し、寛大な処置を取りました。家康を一度裏切った家臣は、家康に対して負い目を感じていたことは想像に難くありません。また、帰参を許されたことに感謝の念を持っていたであろうことも確かでしょう。その家臣たちは、その後、家康を強く支えることになりました。

何に厳しく当たり、何を寛大に見るべきなのか。この家康の判断、智（ち）の巡らせ方には、現代の私たちも学ぶべきことがあるように思われます。